
他問他答

進士夜紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他問他答

【Nコード】

N4124V

【作者名】

進士夜紳士

【あらすじ】

幽霊、怪奇現象、サイコパス……『恐怖』とは常に、未知と寄り添うものだ。だがしかし、人々は気付いていないだけで、日常の一角にもソレは潜む。

あなたにとって恐怖とは、何ですか？

（前書き）

登場人物

僕：君と話す僕

ボク：キミと話すボク

この作品に限り、後書きまでが本編となります。

「そう言えば、なんだけど」

『……ん？ ごめん。ちょっと確かめるけれど……もしかして、今のは僕に言っただのかな？』

「他に誰が居るんだよ。ここにはボクとキミしか居ないだろう？」

『ははは、そうだね。もちろん冗談だよ。君は僕に話し掛けた。その言行に間違いはない。大丈夫、ちゃんと意図は伝わってるよ。電波良好ノイズなしで聴力も快調バッチリだ。君の言わんとしていることは、分かっているつもりさ。そう、僕が意図的に茶化しただけだからね。おつと怒るな怒るな、あくまで軽いジョーク、ほんの出来心……ではないけれど、悪意はあっても敵意はないから安心してくれ。え？ 悪意の出所を知りたい、だって？ おいおい、だって自分の胸に手を当ててくれよ。なに、さっきの行為は僕なりの意趣返し 厳密に言えば仕返しなのだから。とにかく、まあ、此処と言っには多少なりとも語弊が生じるな。より正確に言い表すのなら、これは受話器越しによる会話……だろう？ 君は僕達の居場所を再確認するというよりかは、今現在お喋り中の話し相手として僕の反応を見たかった。期待を込めて、それなりの見返りを求めている。違うかい？』

「……………」

『参ったな。無視とは酷い。いや、この場合は非道い、かな。人の道から外れた仕打ちだよ、無視というのは。なにせ僕の存在そのものが視野に無いのだからね。ああ、でも電話越しなら眼中に無いの

は当然か。視界に入れるどころか声しか聞こえてないんだ。相手の姿が見えないのだから仕方がない。けれど、例えば電話越しであつても無視はしない方が良さと思うな。これは忠告でなくとも警告だ。僕も偉そうに言える立場ではないけれど、人によっては痛んだり傷つく人も居るのだからね。予め言い及んでおくなら、僕は平気。慣れっこなんだ、そういうのは。する方も、される方もね。だから気に掛けないでくれ。っと……少し話題がズレたかな。そうだね、そういった意味では、“会話”という言葉も矛盾に当たると思う。

僕と君は実際に会って話していないし、何よりこうやって電気信号に変換された音声でやり取りをしているんだ。これを会話と定義するのも、可笑しな話だろう？ 僕がこうやって喋っている間も、君は寝ているのかもしれないからね。とてもじゃないが会って話すには程遠い。え？ そんなのは揚げ足取り、だって？ ははっ、それならそれでいいのさ。なにせ揚げた足は僕自身の足だ。自分の揚げた足を取ったところで、柔軟体操かヨガのポーズにしか見えないからね。それよりも、だ。僕は君に無視されたことの方が気に掛かるんだ……ひょっとして、本当に寝ているのかい？ それとも、適当に聞き流しているだけなのかな」

「……まったく、訊いてもないことをベラベラと。打つてない相槌すら予想して……なんだか聞いてるだけで頭痛がしてくるよ。キミさ、いつから理論武装完備の面倒くさい喋り方になったんだ？ 別に弁論大会って訳じゃないんだから、一を訊いて十で応えないでくれ」

『その頼みは満を持して断ると返そう。それは出来ない相談だ。ちよっと前にも言っただろう？ 忘れたのなら何度でも繰り返すけれど。これは、僕から君への仕返しなのさ。君の好意は悪意でもって返還する。それが僕の役目であり趣向だ。君の問い掛けには答えるけれども、君の切実たる感情に応えるつもりは毛頭無い。どうし

て、なんて訊きたそうだね。ははは、まさか憶えていないのかい？
そうか、それじゃあ教えてあげよう。僕は君に、“それだけのこと”をされたのさ。同じ人間、同じ人種、加えて言うなら同じ人権だからね。僕にも同等で対等な権利があるはずだ。無いはずが無い。一発は一発。一言は一言。やり返しの代価は仕返し。どちらかが折れるまで、受け入れるまで続けられる。嫌悪感を覚えるかもしれないけれど、それが人という生き物なんだよ。自己消化か八つ当たりかの二択。そして、それを選び出すのは善人か悪人かの二者択一だ。勝手かもしれないが、君は僕を恨まないでくれよ、じゃないと困る。僕も君も誰かも、色々ね。まあ……大袈裟に話しているけれど、大したことはない。大それたことは出来やしない。精々がこの喋り方ぐらいだから、是非とも許容して欲しいところだな。重ね重ね反復するが、僕と君は電話越しなんだ。君に対して直接危害を加えることは、まず不可能。つまりは叩けないのさ……触れられないからね。それに、気に入らなければ終話ボタンを押す。それだけの繋がりでもある訳だ。言い換えればボタン一つの関係なのさ、僕達は。君の気分次第で、僕の仕返しは無残にも空振りに終わってしまう。とは言え、それは同時に君の質問を放置したことにもなるね。そう、だから疑問を残したままボタンを押す。というのはオススメしないよ。後腐れは君も望まないだろう？ 少なからず興味を引かれたのなら、或いは胸の奥に抱いている靄を青空のように晴らしたいのなら、しっかりと結末まで知るべきだと思う。納得や共感も肯定さえ出来る保障はないけれど、後になってモヤモヤするのは気持ちが悪い。後悔は、しない・させない・考えないのが鉄則なのだからね。僕としても最後まで付き合ってくれと嬉しく感じるで……そうだ、この喋り方はいつから、だったかな。ええと……ああ、さつそくで申し訳ないけれど、忘れてしまったよ。いやははは、電話越しでズッコケないでくれ。誰にだって物忘れの一つや二つ、ましてや生きていれば万にだって届くだろう？ これは生物として仕方のない、どうしようもなく避けられない代謝なのだから許して

おくれよ　その器の広い心でね。とは言っても、この喋り方の由来は、間違いなく誰かの受け売りだろうな。君は理論武装完備と評したけれど、実のところ似たような語句をツラツラと並べているだけなのさ。中身も無ければ厚みも無い。甘くとろけて欠片も残さない。スカスカの綿菓子と同じようにね。記憶に蓄積した言葉の塵を思い付くままに投じている。要するに真似事なのさ、君自身が模倣の塊であるように」

「ボクが……人マネ、だって？」

「その通り、不機嫌そうな声色だね。納得できないかい？　それじゃあ訊いてあげよう……君は、いつから“そんな性格”だったんだ？」

「いつから……ボク、は……キミに？」

「ははは、無理して思い返すこともない。答えられないなら、それでいいさ。イタズラもここまでにしよう。白状してしまうと、僕は“自我なんてモノは存在しない”と思っている。これも自前の思考ではなく借り物の論理だ。人はね、生れ落ちた瞬間から一人じゃないのさ。人から産まれている以上、それは当然のことだけれど。常に周りには誰かが居て、いつだって何かしらの影響を受け続けている。例えば流れるテレビ、例に挙げるとすれば人との会話、例証するならば他人が書いた文字。心当たり、あるだろう？　君の性格、思想、その他諸々のパーソナリティは　全部が全部、作り物の紛い物だ。第三者がコピーしたソレを、さらにコピーしているに過ぎない。俗世から身勝手な価値基準を植え付けられ、人にとって都合の良いモラルを定められ、感性の起伏さえコントロールされて、混ざりに溶けて自分という個を形作っている。その上での選別と差別、区別を経て年輪のように重なっていく訳だ。でもね、混成する前の

ソレは、溶解し得る前のソレは……君の物じゃないだろう?」

「……そんなの、キミだって」

『そうさ、人類皆アレンジ。オリジナルな独自性が許されるのは、他に依存しない無我だけ。世間から切り離された孤高を持つモノだけさ。自我が無い無我が自我に至るとはね、まったく世の中は皮肉で造られているよ。それ故に始まりも終わりも無い完全だ。まるでクルクル回るウロボロスさ。そんな世界でオリジナルを名乗るだなんてナンセンス。はなはだ不合理だね。まあ、そういった人間なんて居ないのだけれど。居るといふか、在るとすれば人ではない自然環境になるのかな……とてもじゃないが、僕には分かりそうにもないね。ん? いやいや、それ自体は悪いことじゃない。僕の呈したそれを個性万歳と謳うも良し、イミテーションで何が悪いと開き直るも好し、端から無頓着を振舞って意識しないのも善しだ。君の自己とやらに任せるよ。それはそうと……君の質問は、何だったのかな?』

「質問……してたっけ?」

『やれやれ、君も僕に負けず劣らず記憶力が優れないようだ。ああいや、別に貶してはいないよ。茶化して笑うつもりなんて、これっぽっちも無い。忘却は人間の短所であり長所だ。いつかの楽しい思い出も、どこかの悲しい過去も、ある日のトラウマでさえ、いずれは色褪せていくのだからね。それこそ有無を言わさず問答無用に、無作為の順不同に。言うなれば黄色や青色の壁に白いペンキを上塗りするようなものさ。薄まる前の色を追想するのは、とてもとても難しいことなのだから。一秒前の出来事は一秒前にしか起こらないからね。時たま反芻しなければ新しい色に目が移る。どうだろう、そう考えると、君が一番最初に訊こうとしていた事柄は、君の中で

優先順位が低かったんじゃないかな。違うかい？」

「優先順位が、低い？」

『言わば“どうでもいい”ってことさ。君が尋ねたかった質疑は、今や物置の隅の底の奥まで押し込んでしまった訳だ。埃にまみれて他のアルバムと見分けがつかないぐらいにね。誰の所為でもなし、君自身の意思で。意思是環境　そう解釈すれば、僕にも責任の一端はあるのかもしれないけれど。それにしたって世間話並みの関心だったと思うよ』

「……もうさ、電話切ってもいいかな？　いい加減、キミも喋り疲れたろ……ボクも疲れたんだ。なんだかとっても眠いんだ」

『ダメ。どこそのパトラッシュの飼い主っぽく提案しても却下だ。業腹な反骨心は認めるけれど……僕に、その気は無い。幾ら本筋を見失ったからって諦めるには早計過ぎる。見失ったなら探せばいいし、探す眼が無ければ感じればいい、感じられなければ見つけて貰う。そうだとも、疲れたから放棄するなんて愚の骨頂だ。愚者の骨で築かれた頂だよ、それは。そもそも人は生きていくだけで疲れるからね。休まらないままに、その一生涯を費やすのさ。ひたすらに放電と充電を繰り返す　君の耳元にある携帯電話のようにね。何度も何度も、バッテリーという器が壊れるまで、だ。食事と睡眠は消耗する為の備蓄、安息と休息は心労の軽減　だけれど、そうしている合間であつても、疲れが跡形も無く消え去った訳じゃない。そうだね、さながら人の記憶みたいだ。忘れることがあつても決して無くならない。脳は二十四時間年中無休無賃金勤労。労働基準法なんて適応されるようには出来ていないのだから。うん、君が嘆くのも分らないでもない。僕を氣遣う素振りでもって雑談を終わらせようとする運びも天晴れだ。でもさ、君は僕の気持ちを代弁した

気になっているけれど、僕の心情を語れるのは僕だけなんだよ。いや……語弊かな、怒ってる訳じゃないんだ。ただ、君のミックスされた主体で一方的に共感を得るのは、どうかと思うだけで。好きじゃないんだ、そうやって知らない間に自分を見透かされるのは。底が透けて覗ける浅い人間だとは思われたくない。誰にだって多かれ少なかれ、矜持はあるものさ。気付かない内に手玉に取られ、掌の上でコロコロと転がされるのは御免だ。君だって、そうじゃないのかい？」

「ごめん。正直、さつきからキミの話が頭に入ってこないんだ。なんかさ、学校の授業が眠たくなる理由が分かった気がするよ。興味が無いんだろうな、こんな雑学聞いても役に立たなくて無意味なだらうな、って感じで。どこかで耳にしたような、偏った哲学を復唱されてるっていうか？ ううん……ああ分かったよ、もうキミの好きにしたらいい。何でも言う通りに従う。思う存分、気の済むまで嫌がらせしてくれ。ボクは適当に生返事するから」

『いいね、そのリアクションは概ね正しいよ。他者を信じたり、無防備にイエスと頷くのは簡単だ。何事も受け流して生きるのは楽だからね。反して大きな意志があるほど、周りという水の流れは塞き止められてしまうものだ。相応にして石が無い方が川はなだらかに下るのさ。だけれど僕も感じ続けている。ある種の既視感が邪魔をする。ただの安楽を、させてはくれない。体感した経験が予想と推察と憶測で“当たり前”を作って、見上げたり見下げたり。自分中心の心的傾向に伴う真新しさが、ことごとく生まれないのさ。授業にしろ何にしろ、ね。君にとって物事が単純で退屈に思えるのは、それらが原因だと見受けられないだろうか。日々の生活に苛立つてストレスを抱えてしまうのは、心に鮮やかな色が無いからだと考えられないかい？ ルーチンワークで刺激が薄い。色素が剥脱された混合色ばかりだとは思わないのかい？ さあ……いいいよ、応え

てくれ。君は未知を恐れるあまり、自らの既知を増進させているんじゃないか？」

「……………そう、かもね。うん、もしかしたらキミの言う通りの気がしてきた。ボクは見るもの全てに、いちいち驚いていない。それって知らない内に、周りに慣れてるってことなんだろう？　新しい家でも学校でも会社でもさ、だいたい一年もしたら安心して、暮らし易いリズムを作って、どこかで安定させて。緊張とか外の怖いモノを、内側から取り除いて。考えない、感じない、見なかったことにして……………知らず知らずに、無視したり。でも、それがどうしたっていうんだ。ああ、分からないことは怖いよ。ポルターガイストや心霊写真なんて目にした日には、心臓まで凍りつきそうだ。怪奇現象みたいな類はインチキのヤラセなんだと信じたい。想像上のフィクションで完結させたい。まだ見ぬ恐怖なんて　知りたくもない。だからこそボクは、疲れたら休んで、何の変哲もない退屈が好きなんだと思う。仰天なんて望んでない、ドッキリな展開は物語りの中だけで十分。怖いもの見たさで、ボクの現実を持ち込まないで欲しいよ。大体、そんな何でもかんでも新鮮に思える人なんて、赤ん坊ぐらいじゃないか」

『いいや……………実を言えば、そうでもない。未知の引き合いに靈魂を出すまでもなく、僕達はたった今も不可解を味わっている最中だ。それは他人の心だったり、世界そのものだったり……………でもね、それらに触れようと思えば、いくらでも触れられる距離にあるんだよ』

「嘘だね。ボクが思うだけじゃ、キミの考えていることまでは分からないよ」

『なら、その達者になった口で試してみるかい？　僕は君になって、君の喋り方で、君が話していたことを真似てみせよう。互いの気持

ちを知る為の、意思交換をしようじゃないか。人の五感は視覚より聴覚に重きを置いているって通説もあるぐらいだ。面白い実験だろ
う？ 君は僕になって、僕の饒舌で、僕の口述をマネるのさ。世界
に染まって染められて、今まで通りにね」

「僕が、キミになって」

『君が、ボクに成り代わる』

「……訊きたいこと、あるのかい？」

『そう言えば、なんだけど』

（後書き）

自分で執筆しておきながらゲシュタルト崩壊っ！　というのは、さて置いて。

初めましての方は初めまして。作者の進士夜　紳士です。

ここまで読んで頂き、誠に有難う御座います。もう少しだけです
ので、お付き合い下さいませ。

本作は初のホラー短編となります。という訳で、私なりに『恐怖
とは何か』を考察してみました。

まず、真っ先に脳裏をよぎったワードは『怪奇』です。幽霊しか
り妖怪しかり都市伝説にしかり、ホラーというジャンルの中では、
最早ポピュラーな題材ですよね。次に殺人鬼や狂信者といった『サ
イコパス』、人によって種別を変える『性質的恐怖症』、さらには
エイリアンや巨大生物といった『未確認生命体』と。大まかに分類
して、この4つ辺りではないでしょうか。

では、これら4つの共通点　ホラーをホラーたらしめている要
因を探してみます。

見解は人によって様々なのでしょうが、私の場合は『未知』と『
危害』だと思い至りました。

理解できない、訳が分からない存在　未知。自身に何らかの災
いが降りかかる　危害。

例えば、私が街中で熊を目撃したとします。全長三メートル強の、
腹ペコで野生本能全開な巨大熊です。

ええ……大抵の人は近寄らないでしょう。私も遭遇したら猛ダツ
シュで逃げます。

何故なら、それは怖いからです。街中で凶暴な熊が野放しにされ
ているという未知。ベアークローによって与えられる危害が怖くて
仕方ありません。逆に、野次馬根性で熊へと近づく人（又は熊の獐

猛さを知らない人）は、そういった恐怖を感じていない　もしくは、危険なんて意識の範疇外、『自分が巻き込まれるはずが無い』と考えているのではないでしょうか。好奇心が恐怖心より先行している、そんな風に思います。そういった未知や危害を承知の上で、恐怖を呑み込んで事に当たる警備員さんは本当に格好良いです。羨望というか、憧れます。

さて、冗長な前書きも程々に、ここで仮説を立てましょう。

あなたの友人は、自分以外の他人　つまりは『未知』ですね。そして、あなたに『危害』を加える可能性は必ずしも0%ではありません。

この時、あなたは友人を『怖い』と感じますか？

ちなみに、私の答えは否です。全く怖くありません。というか、ささやかな危害を加えようものなら、普通にやり返すと思います。理不尽な倍返しです。

それは偏に、“慣れているから”でしょう。友人を少なからず知っている。そんなことをするはずがないと……理解しているし、わざわざ意識したりしていません。照れてしまうので面と向かって言えないですが、ある程度は信頼しています。

しかし、もしも友人が包丁を握って私を睨んでいたのなら……きっと私は、怖くなるのでしょうか。信頼と裏切りは紙一重、そして日常は非日常と表裏一体。隔てる脆い壁を打ち壊し、トランプタワーや積み木のように瓦解を引き起こすことなんて、割と簡単です。

要するに、何が言いたいのかと申しますと……意外と、恐怖は身近にあるのですよ、ということです。

身近に在る恐怖に“慣れる”こと。そんな高等技術を、我々人間は自然と身に着けているのだと思います。空気のように溶け込むソレは、感じていないだけで、考えていないだけで、そこに確かに存在しているのです。

具体的には、避けようのない『死』という概念で　　つと、この話題は重すぎるので敬遠です。語るのは止めにします。『死』をもっと間近に、もっとオブラートに包んで表すのならば『時間』という形で、私達に押し迫ってきています。まあ、分かり易く言い換えれば寿命ですね。誰しもが通り、考える道です。無限に思えるようにいて、実は有限な時間。

けれども人は、“どうでもいいこと”を忘れて生きていく。忘れて、同じ行動や言の葉を繰り返す。

そう、例えるなら………ほら、日常会話とか。

そんな訳で、僕とボクの「他問他答」でした。一応、ホラーな作品です。参加企画である「夏のホラー2011」という大海に、一石投じられていれば幸いです。

怪談は『化け物や幽霊』だけではなく、『真相が定かでない』という意味合いも含まれていますからね。なんと言いますか、メメント・モリって感じですよ！

余談ですが、本編の冒頭で訊いた質問の内容は……『電話料金つて、どっちが払うんだっけ？』でした。

電話で長話をしすぎると、なんとなく気になりますよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4124v/>

他問他答

2011年10月2日15時12分発行